

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.133

2014.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

39

「県教委埋文担当指導主事第一号 林茂樹先生」

関東・近畿の都市部での開発と埋蔵文化財保護の対峙は昭和30年代から見られた。内陸部の長野県では遠い地域のことと思っていたが、30年代後半から開発に伴う調査が小規模ながら始まった。休日をつかって地域の教員を中心とした研究者が対応していた。35年20・36年23・37年22・38年37・39年42・40年49と38年から開発に伴う発掘調査が急増し、保護対策のために県教育委員会に考古学専門の担当指導主事を置くべきとの声が強くなり、40年に林茂樹先生が県教委社会教育課文化財係の中に埋文担当として入った。当時全国47都道府県の中で考古学の専門主事は8名だったという。その点では長野県は早かったといえる。

早かった面、埋蔵文化財保護の理解は県庁内の開発関係部局や開発を目的の企業局での担当者に殆ど無かった。県教委としては24年公布の『文化財保護法』を受けて、27年に県教育長名で『埋蔵文化財の取り扱いについて』の通知を出し、30年に県教育長及び県庁各部長連名で『埋蔵文化財保護協力依頼について』の県報通知を出す。『農業基本法』や新産都市建設計画等による開発計画が実施され県内でも埋蔵文化財保護が問題となった。39年に県教育長名で『文化財保護に関する関係諸官庁間の連絡強化について』という通知が出されたが、開発側は保護よりも開発が優先という考えが強く埋蔵文化財は開発にとって邪魔だという意識が強くこれまでの通知は無視されていた。そうした環境の中での林先生の登場となった。無理解な関係部局を回って埋蔵文化財保護の重要性とどうしても緊急調査の場合の原因者負担であることを説得する等本当に孤軍奮闘の毎日でした。結果、42年の『公共開発事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて』の県教育長と各部長連名の通達となった。

通達に先立って41年に長野県考古学会の協力で県下全域の遺跡分布調査をし、遺跡カードと市町村別遺跡分布地図を作成した。『長野県

遺跡地図』を各部・各課の出先機関に配布し、開発地の遺跡確認の徹底を図った。市町村には遺跡地名表と遺跡地図を配布し保護の徹底を依頼する。

新産都市開発地域の分布調査では単なる分布調査ではなく、試掘調査を実施し各地区で大きな成果を挙げた。当時発掘調査までしたと文化庁で問題になったという。

開発に伴う開発側との保護協議も積極的に行い、そのために実施された緊急発掘調査も各地に見られた。森將軍塚・長原古墳群・大室古墳群・海戸遺跡・神坂峠・福島遺跡・月見松遺跡・茅野和田遺跡・中越遺跡等がある。

何ととっても大変だったのが高速自動車道中央道の計画でした。文化庁は開発側と覚書を取り交わし、日本道路公団とも『埋蔵文化財発掘調査実施要領』と『埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』を取り交わしている。40年に文化庁記念物課に坪井清足さんが入り、中央道内の遺跡調査の関係県の対応指導に当たった。同年に林先生が長野県庁に入り、数少ない考古学専門家ということで文化庁に呼ばれて坪井さんと共に調査の方向付けを決めた。一つは調査の体制作り、もう一つは予定地内の遺跡分布調査でした。国庫補助金事業で県考古学会・地元教委の協力で中央道が通る下伊那・上伊那・諏訪の3地区の分布調査をした。下伊那147・上伊那112・諏訪90計349遺跡を確認し報告書を刊行した。体制作りは調査主任に考古学専門の教員からの派遣で、調査員には大学で考古学を専攻した若手を採用することにした。その確保に苦勞し遮那藤麻呂(立正大)・小林秀夫(明大)・佐藤攻(明大)・土屋長久(国大)・青沼博之(愛大)の五人を決めた。所が中央道の用地買収が進まず、林先生はこの五人の生活保障に苦勞し、多くなった各地の緊急発掘調査に調査員として送り込んで、45年9月までの中央道用地内遺跡発掘調査までその場しのぎで、林先生も五人も本当に苦勞した。

林先生の中央道調査が始まるまでの三年間の努力苦勞は大変だったと感謝する。

*巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。



▲講演する林先生



◀中越遺跡での林先生(右端)

目次

■田舎考古学人回想誌 県教委埋文担当指導主事第一号 林茂樹先生 神村 透 …1
 ■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第2回) 岡田淳子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第126回) 布施和洋 …3
 ■考古学者の書棚 「かまくらこども風土記」 古田土俊一 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第2回) 岡田 淳子

②明大考古のカリキュラム

1951(昭26)年、私は明治大学文学部史学地理学科(考古学専攻)に入学した。

入学試験のとき、すでに在學生と気軽に話していた静岡市登呂遺跡のMさん、入学試験場で偶然隣の席だった網走市モヨロ貝塚のNさん、三浦半島で赤星直忠氏から薫陶を受けたKさん、上流社会に暮らしてきたTさんらが、考古学専攻の同期生になった。

私を加えて5人は、土器洗いに励み、一緒に縄文の原体を作り、英語の原書を読んで、考古学調査の経験を語り合った。また、空き時間に湯島の聖堂まで散歩したり、神田の古本屋歩きの折、駿河台下で当時流行し始めたラーメンを食べたりして、学生生活を楽しんだ。

現在では珍しくないが、考古学専攻のある学科としてカリキュラムも整っていた。史学地理学科なので講義の種類が多彩、歴史や地理の概説だけでも多い上に、関連諸科学も加えられていた。なかでも岡正雄先生の民族学、井上光貞先生の日本古代史が心に残っている。専任の先生が行う考古学各論は、在学中に全部聞くために「1部(昼間部)と2部(夜間部)の両方の講義を取るのが望ましい」という教授の指導で、朝9時から夜まで大学にいて空き時間には考古学整理室で土器洗いを手伝った。考古学研究室では壁一面を埋めた専門書や報告書が、学部の子生にも開かれていて、私たちにとっては宝箱のようであった。

特別講義も毎年行われ、山内清男先生の縄文土器、鈴木尚先生の日本人の骨学、石田茂作先生の仏教考古学、駒井和愛先生の東北アジア考古学などの講義を聞く機会が与えられた。それは大学の卒業単位が124単位なのに、私に169単位を履修取得させたことにも現れている。これによって私は短時間で多くのことが学べる講義や講演を聴くのが好きになり、読書を二番目にする生活スタイルになっていった。

原書購読で接した本は、もともとアンリ・ブルイ(Henri Breui)がフランス語で書いた一般向けの本を英訳したもので、杉原荘介先生は外語学校(現東京外国語大学)の出身なのでこの本を選び、私たちにも考古学を学ぶならフランス語を修めるようにといわれた。

演習や実習で、発掘の準備から進め方、平板測量、三角測量、トランシットの使い方、遺物整理のための土器や石器の実測法、拓本の取り方、乾板写真の撮り方など、マーコや拓本墨作

りも加えて必要なこと全てを組織的に学んだ。21世紀の今からみるとアナログであるが、このとき大塚初重、芹沢長介、岡本勇など諸先輩の温かい指導があって、緊張しながら着実に身に着けることができた。ことに、写真学校の出身だった芹沢長介氏から撮影技術を習うという幸運にも恵まれた。初め、私の撮った土器の写真は「蝉が止まっているよう」だと評されたが、それが奮起する原動力にもなった。

当時の明治大学考古学研究室は草創期の活気に溢れ、国や大学からの研究費もかなり潤沢だったらしく、杉原荘介助教授を中心にする先縄文文化の調査と、後藤守一教授の東日本の古墳調査が次々に行われ、私たちは様々な発掘調査に参加し学ぶことができた。

私は考古学専攻の最初の女子学生で、女でも何ができるか「経験して見るように」と、恵まれた環境が与えられたことを感謝している。

夏休みや年度末休みは発掘である。大学の4年間に研究室主催の多くの発掘に参加させていただいた。中旧石器時代の遺跡としては、茂呂、武井、矢出川の各遺跡。縄文時代の遺跡はほとんど貝塚だったが、神奈川の大丸、千葉のコテ橋、堀之内など古東京湾周辺の遺跡。弥生時代では大阪府大和川河畔の瓜破遺跡。古墳時代では茨城の丸山1号墳、3号墳、愛知県の北の谷1号墳、北山古墳群。見学に赴いて手伝った遺跡は数知れず、中でも心に残っているのは、卒論の資料集めの折に参加した板付遺跡と月の輪古墳の調査であった。どちらも私の人生に少なからぬ影響を及ぼしている。

その頃まだ日本舞踊のお稽古を続けていた私は「そんなことをしていたのでは考古学の研究は成就しない」と言われ、辞めた。卒業が2ヶ月後に迫った頃には山内清男先生からの伝言として、東大人類学への受験を促された。大学院進学は夢だったが、兄弟の多い私は学費も限界と思い、東京都の教員試験を受けていた。だが国立大学なら授業料も5分の1、その道もあろうかと、受験することにした。研究が成就したかどうかを別にして、私はこのようにして研究への道へと舵を切ったと思う。

私たち同期生は、みな高校時代の興味を形にして、卒業論文を仕上げ卒業した。私の卒論題目は「古墳時代の土器の研究」、生意気にも土器師の斉一性と地方性を日本全域に問うものであった。同期生の一人は私立高校教員、三人は考古学を活かせる公立博物館の学芸員になって、長く考古学に関わる人生を送った。



▲史学科全体の実習—昭和26年の武蔵国分寺 1951.6.13

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウイスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 126

聖寿寺館跡 ～青森県南部町～

布施 和洋

青森県に来て6年目、もともと函館出身の私は大学・大学院時代は北海道で中世遺物をメインに調査をしていたが、やはり北海道という土地柄からか現場はオホーツク文化やトビニタイ文化、アイヌ文化の遺跡を調査することが多く、本格的な中世城館の調査に憧れていた。

実際、高知県高知城の石垣調査や青森県十三湊遺跡の調査など中世や城郭に関連する現場も経験できたが、一方、北海道知床半島にあるオホーツク文化の遺跡であるチャシコツ岬下B遺跡やトビニタイ文化の以久科北海岸遺跡、海外だとバイカル湖北西の旧石器時代の遺跡であるパリショイナリン遺跡群、またはロシア沿海地方の金・東夏代城郭の測量調査なども経験させていただいた。

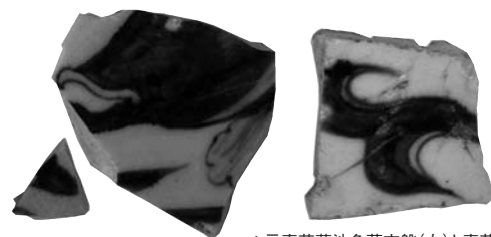
しかし、中世城館を調査したいという思いが強く、縁あって南部町に就職した。

南部町はその名の通り「南部藩発祥の地」といわれ、盛岡築城以前の南北朝時代から戦国時代までの三戸南部氏の居城があり、盛岡藩開祖の26代南部信直や27代南部利直等当主の墓所・霊廟が残されている。その中心となるのが聖寿寺館跡であり、中核部分が当主の墓所霊廟とともに平成16年に国史跡に指定された。

中世南部氏の権力構造は信長や秀吉のようなトップダウン型ではなく、ゆるやかな一族連合の形をとり、南部氏一族には「三戸南部氏」「根城南部氏」「七戸南部氏」が、さらに一族から出た重臣には「北氏」「南氏」「東氏」などがおり、それぞれが半ば独立した形で存在した。このことは曲輪配置や各曲輪間の高低差の無さに表れている。聖寿寺館跡を築いた「三戸南部氏」はその南部氏連合の盟主的立場にあり、津軽地方や岩手中部に勢力を伸ばすに至る。聖寿寺館は1539年に家臣の赤沼備中の放火により焼失し、廃絶したと考えられるがその後、三戸南部氏は青森県三戸町の三戸城に、さらに岩手県二戸市福岡城に居城を移し、最終的には近世段階で盛岡城に移る。

聖寿寺館跡は馬淵川支流の猿辺川・鱒沢の左岸に位置し、標高は平場で約60～70mを数える。川面との比高は約20m～30mで、台地端部に占地した大型の城館である。城館の西

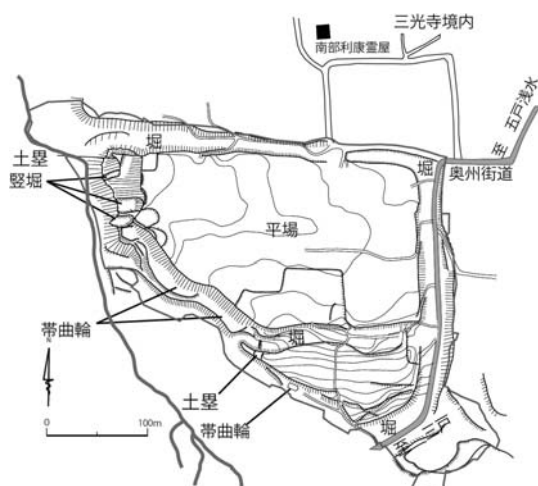
側は鱒沢川の天然の断崖によって守られ、北側と東側は幅10～30mの大規模な堀によって台地から切り離される。東側の堀底は奥州街道として利用され、さらに南側には鹿角街道と奥州街道の分岐点が立地し、追分石が置かれている。城館が河川・陸上ともに交通の要衝に立地していたことがわかる。街道を城館内に取り込みながらも、街道が通る東側の堀は二カ所で意図的に曲げられ、見通しが悪く作られている。城館の平場は大きく分けて上段と下段の二面からなり、5mほどの比高を数える。上段・下段の平場の中間には東西に堀が通っており、堀の中央部には上段の平場へと至る虎口が想定される。帯曲輪は城館南西部に配され、幅約10m、長さ150mに及び、上段平場との比高は10mを数える。竪堀は城館北西部の急斜面に3条あり幅約10～20mを測る。土塁については、城館の上段平場の西側縁辺部にわずかな高まりがあり、平成25年度の調査で一部を切断した結果、基底幅約3m・高さ1～1.2m程度の土塁跡が確認された。また、土塁を平面的に掘り下げたところ、中ほどからは柵列の基底部と考えられるピットも確認された。他の防御施設としては北西端部の堀切とその対岸の高まり(土塁)も確認されている。この遺構は竪堀と合わせて、聖寿寺館跡が存続していた最終末期となる16世紀代に改修されたことが千田嘉博氏によって指摘されている。しかし、畝状竪堀や塁線の屈曲が見いだせないこと、また虎口の形が明確な屈曲を示さないこと等から16世紀後半代には下る要素がないことがわかり、14世紀中葉～16世紀前葉と考えられる出土陶磁器の年代と一致する。城館西部からは1539年の焼失時に火事場整理に用いられたと考えられる井戸跡が確認されており、大量の炭化物・角釘が出土している。



▲元青花蓮池魚藻文盤(左)と青花龍濤文壺(右)

特出すべきは出土陶磁器の質である。国内に4例ほどしか出土例のない青磁鉄班文瓶をはじめとして、国内最北の出土となる元染付の龍濤文壺、蓮池魚藻文盤、瑠璃釉壺、青磁酒会壺など威信材と考えられる陶磁器が出土している。そのほとんどが、平場西側から確認された主殿と考えられる掘立柱建物周辺に集中している。

また、特異な遺物として国内最南端の出土となるアイヌ文化の骨角製品があり、総数で20点が出土している。20点中7点が骨鏃や弓矢に用いる中柄、刺突具などの狩猟用製品である。その他には未成品や素材となる加工痕のある鹿角も出土していることから、城館内でアイヌ文化集団が道具を製作していた可能性も考えられる。なお、鹿角は金属加工に用いられた可能性もある。珍しい製品としては、青銅製鞋(こはぜ)を模倣



▲聖寿寺館跡縄張り図

した骨角製鞋(こはぜ)が1点、端部に沈線の刻みがみられる骨角製耳かきが1点出土している。

このように、聖寿寺館跡は北のアイヌ文化と南の和人文化の交わり合う状況にありその特異性を物語る。

現在、町では史跡聖寿寺館跡の史跡公園化やガイダンス施

設の設置を目指しており、また、今後も聖寿寺館跡をはじめ周辺の当主の墓所と考えられる塚や平場の遺構確認を実施していく予定である。青森県にお越しの際は是非、聖寿寺館跡まで足をお運び下さい。

※次回のマイ・フェイパレット・サイトは林 勇介さんです。

考古学者の書棚

「かまくらこども風土記」

鎌倉市教育センター編／鎌倉市教育委員会(2009)

古田土 俊一

中世都市鎌倉の遺構・遺物を見るうえで、当時その場にどんな人物が住んでいたか、どんな施設が存在し、どんな役割を持っていたのか、その歴史的環境は、ある程度推察することができる。それを裏付けるための文献史料が鎌倉にはある。

もちろんその結論を断定することはできないが、疑問を解決するため、あるいは自他を納得させるため、慣れない文献史料を引っ掻き回す。幕府の歴史書『吾妻鏡』はもちろん公家の日記に『太平記』などの軍記物、権利書や手紙などの古文書や寺院名が記される聖教類までと史料は膨大。それらを掲載する書籍『国史大系』『鎌倉遺文』『群書類従』や『神奈川県史』『鎌倉市史』と本はどんどん巻数と厚みを増す。近世の地誌『新編鎌倉志』や『新編相模風土記稿』も忘れてはならない。もちろんこれらを使用するのは、それらを読み解く歴史研究者の論文を参考に、であるが。

育ちの悪い私は使った本を書棚に戻さず、床に積み上げる。当然足の踏み場はない。床が見えるのはいまの原稿を仕上げたあとだ。なお『金沢文庫古文書』など高く買って買えない史料も多い。コピーはさらに床を埋め尽くす。

その床に積まれた資料の中に必ず含まれる本がある。書名は『かまくらこども風土記』。その名が示す通り鎌倉に住む子どもたちのための本で、いわゆる郷土学習資料に分類されるのだろうか。しかし、ただの児童書と侮ってはいけぬ。

本書の初版発行は昭和32年で、現在までの改訂は13版を数える。最近では平成21年に改訂が行われた。子どもにも理解できるよう配慮した内容は大変わかりやすく、大人がイチから学ぶにもよい。さながら子ども向けニュース番組のようなものか。その時代における正しい認識を伝えるため、改訂のたびに新たに判明した史実を加え、認識の改められた記述を修正し、史料価値の高い写真はそのままに、不鮮明なものは撮り直すなどの作業が繰り返行われてきた。

本書の構成は、鎌倉の名前の由来、旧石器時代から現代までの通史を概観する「鎌倉のあゆみ」に始まり、以下小町、雪ノ下、西御門…と地域ごとの歴史が紡がれてゆく。各地域のはじめには地図が掲載され、本文中に登場する寺社や史跡またはその案内碑の場所までもが掲載されている。

本文は地名の由来から始まり、歴史を有する寺社などの施設を項目として進行するが、必ず駅などのわかりやすい場所からの向かい方で始められ、つづく項目は前に紹介された施設からの足取りで場所が示される。そここが寺社であれば、その創建から現在までの歴史が要説され、関わる人物の紹介や伝承、風習のほか、専門用語にはコラムでの解説が付属する。

なお、掲載される写真はすべてカラーであり、この本を持ちながら鎌倉を散策するのもいいのだろうが、A4版で400頁は少々かさばるかもしれない。この大きさになったのは最新版からで、それ以前は45版の4冊構成だった。その日尋ねる地域の載る1冊を鞆に忍ばせ歩くことも可能だったのだが、読みやすさや図版を大きく掲載できるなどの利点を優先させてのことなのだろう。

初版が発行された昭和32年は戦後の教育制度が発足して10年を迎えた年だった。それからおよそ60年、本書は鎌倉の歴史研究と歩みを共にしてきたと言っても過言ではない。子どもたちのためにと集められた郷土の最新情報は、幾多の改訂を経ることで、研ぎ澄まされた文章となって現在に歴史を紡ぐ。こうした経緯を経た当時の最新情報は、現在においては一種の伝承史料へと昇華した。それは、この本にしか掲載されていない情報となって表れる。

一例を挙げたい。鎌倉市常盤地域に所在するマンションの一角に中世の石塔群が存在する。調査すべく噂を頼りに訪ねてみれば、鎌倉でも稀に見る大型の五輪塔や数の少ない層塔を含む十数基の塔がまとめて安置されていた。これは鎌倉の石塔を紹介する『鎌倉国宝館図録』や『市史』考古編にも掲載は無く、各地誌にも全く触れられていなかった。そんな由来不明の石塔群について丁寧な解説を掲載していたのが、本書だった。本文には「御嶽神社跡の下の土地には五輪塔や石塔がたくさん並んでいました。これらは聖ミカエル学院幼稚園を建てるために地面を掘り返した時に出てきたものだそうです。大切なものなので、ここに並べてまつたのですが、今はマンションへ上る途中にまつられています。」とある。これをもとに他の文献を探したところ、行政関係の雑誌に幼稚園建設の際、石塔群が出土したことを記すコラムを見つけた。ただし、現在の場所に安置された経緯を記す資料は本書だけであった。

私は鎌倉市内の歴史を調べる際、まず本書を広げることにはしている。すべては歴史ある鎌倉という地に住む子どもたちに、誇りを持ってもらうため始まった事業なのだろうが、その恩恵にあずかるものとして、編纂に携わってきた歴史学者、考古学者、郷土史家そして行政のお歴々に敬意を表したい。おそらく、床に積み上げられた資料がその様相を変えても、この本が書棚に戻ることはないのだろう。

アルカ通信 No.133

発行日 2014年10月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp